タイムリープしたら花垣武道の従兄だった件について

あずま渡里

タイムリープしたら花垣武道の従兄だった件について

あずま渡里

ハジマリの日

ずっと、好きだった男がいた。
ちんちくりんのくせに、全国制覇した暴走族の総長代理で。だけどちんちくりんのくせに変なところで図太くて、最初はコッチにビビってたくせに一度、気を許したらピカピカの笑顔を向けてきた。
そんなちんちくりんを、蘭はずっとずっと想っていたが――そいつには、蘭と出会う前にすでに可愛いヨメがいて。悔しいがそのヨメといる時、一番の笑顔になったので自分の気持ちを伝えることすら出来なかっし、結婚式にも参加した。情けないが、日和ったとも言う。
（……もし俺が、誰よりも先に代理に会ってたら）
誰よりも可愛がって、甘やかす。いっそ囲い込んで、皆を助けさせたりも怪我させたりもしない。そしてヨメに見せてた笑顔を、俺だけに向けさせる。
（そうしたら、泣き虫ヒーローにはならねぇかもしれねーけど……良いよな？　甘えたなのも、可愛いじゃんなー？）
そこまで考えて、蘭はため息をつくように笑った。妄想でしかないことを、どこまで真面目に考えているのかと。
そしてそんな妄想を、蘭は弟にすら言わずに墓場まで持っていった筈なのだが――。

※

「蘭、竜胆……この子が、あなたの従弟の武道君よ？」
「いとこぉ？」

「っ!?」

気づけば蘭は知らない家にいて、若返った母親が縮んだ竜胆と蘭に説明してくれていた。

そう、鏡がないので解らないが、自分の手や目線の低さから解る。隣の三歳くらいの竜胆同様、蘭も縮んでいると――子供に、戻っていると思われる。

（こういうの何だっけ？　タイムリープ？　そういやガキの頃、ババァにこうして連れて来られたことあったな。前の時は竜胆以外いらないって言って、すぐ帰って二度と会わなかったけど……って、武道!?）

そこで先程、母親が口にした名前に思い至り、蘭は慌ててベビーベッドの中にいる赤ん坊に目をやった。

……そんな蘭を、ずっと恋焦がれた青い瞳が真っ直ぐに見返してきて。

「あぅー」

ご機嫌に笑った、赤ん坊――武道に心臓を撃ち抜かれながら、蘭は母親に言った。

「かわいい……いとこって、かぞく？　またあえる？　ねぇ、なかよくするから！」

「にいちゃ？」

「りんどーもなかよくしようなー。おとうとぶんだぞー？」

「おとーと？　やったぁっ」

「蘭……？　そんなに武道君のこと、気に入ったの？」

「蘭君、竜胆君。ありがとうね……姉さん？　また、蘭君達と一緒に遊びに来てね？」

「え、ええ……ありがとう、また来るわね」

今まで竜胆しか相手にしなかった蘭の豹変ぶりに、母親が困惑するのが解ったが――武道の母親である叔母がそう言うと、嬉しそうに微笑んだ。昔から美人ではあったが蘭達とは距離というか壁があり、少年院に入った後

は会うことはなく、金だけの付き合いになったのでこんな母親は知らなかった。
（でも、まぁ、好都合だよな）
内心でペロっと舌を出しつつ、蘭はにこにこ笑いながら武道へと手を伸ばした。
「らんちゃんだぞー？　よろしくな、タケミチ♡」
「おれはりんどー、よろしくなタケミチ！」
「あー」
そんな蘭を真似して、竜胆も手を伸ばし――赤ん坊の武道は小さな手を精一杯伸ばし、満面の笑顔で蘭達の手を握り返してきた。

武道が小学一年生になった時、ある宿題が出た。『ぼくの・わたしの名前の由来について』だ。
母親に聞くと「元気で、逞しく育つようにって」という答えが返ってきた。それをノートに書いたところで、ふと武道は思った。
「蘭君と竜胆君は？」
「さぁねぇ……姉さんの名前が『百合子』だから、同じように花からつけたのかしら？」
「お母さんは、菜々子だよね？」
「春生まれだからね。姉さんは、夏生まれ」
「そうなんだ……蘭君達にも明後日、聞いてみる！」
母親の言葉に、武道はふんすと気合いを入れた。そう、次の土曜日は午後から従兄の蘭と竜胆が泊まりに来るのだ。月に一度の恒例行事である。ちなみに同じく月に一度、武道が灰谷家に泊まりもしていた。
そして伯母の百合子に連れられ、やって来た蘭と竜胆に挨拶し、一緒におやつを食べながら武道は二人に名前の由来について尋ねた。
「名前の由来？　そりゃあ、俺と竜胆の干支からだな」
「……え？」
「花からってのもだけど、竜胆は龍だろー？　さて、蘭ちゃんの干支は何でしょう？」
「兎……でも、どうして蘭の花？」
「富貴蘭に、赤兎って品種があるんだと。ただ、そのまんまだと花っぽくないから蘭なんだってさー」
「兄ちゃん！　そうやって、すぐいいとこ取りするっ」
蘭が弟の分まで説明したのに、竜胆が唇を尖らせる。そんな二人を交互に見た後、武道は不意ににっこり笑って口を開いた。

「蘭君は綺麗で、竜胆君は強いんだね……二人に、すっごく似合ってる！」
「「武道……」」
「えっ？　わわっ！」
そんな武道は次の瞬間、蘭と竜胆に両方からぎゅうぎゅうに抱き着かれることになる。

ハジメテの日

蘭の父は、外資系会社の日本支社長だ。更に英国との混血である彼は金髪紫瞳の美丈夫で、母以外にも愛人が複数いてほとんど家にいない。

そして武道の父は、普通のサラリーマンなのだが――それ以外で蘭の父親と違うところは、武道の母を溺愛していることだった。それ故、武道の父は妻の姉である蘭の母と、その子供である蘭達が遊びに来るのをむしろ喜んだ。結果として、月に二度くらいのペースで蘭は武道と会っている。

「タケミチ！」

そして今日、遊びに来た蘭達を母親に抱っこされた武道が向かえてくれた。そんな武道に、蘭は満面の笑みを向けた。

武道と初めて会ったのは、生後約六か月（確か、一月だった）。そしてそこから、更に四か月くらい経って季節は春になっている。そろそろ歩いたり（今でもハイハイはするが）話したりする頃なので、蘭は武道に会うのを楽しみにしていたのだが。

「らぁく！　りどく！」

「「っ!?」」

青い瞳をキラキラと輝かせ、武道が蘭と竜胆らしき名前を呼ぶ。話せるようになったら呼んでほしいと思っていたが、まさか今日聞けるなんて。

だが、蘭の驚きはそれだけではなかった。
母親の腕からそっと降ろされた武道が、よちよちと歩いてきて――咄嗟に広げた蘭の腕の中にぽすん、と飛び込んできたのである。
「らぁく！」
「タケミチ……すごいなっ」
笑顔で再び名前を呼んできた武道を、蘭はたまらず抱き締めた。とは言え、赤ん坊の武道と伸ばした金髪を三つ編みにした四歳児の蘭なので、大人達からは微笑ましく見守られている。
「にいちゃ、ずるい！」
「りどく！」
「タケミチ！」
金髪の髪をおかっぱ頭にした竜胆だけは自分も名前を呼ばれたのに、蘭に弟分の武道を取られたと唇を尖らせる。けれど蘭に抱き留められながらも腕を伸ばし、名前を呼ぶ武道に竜胆はパッと顔を輝かせた。
「昨日、歩き出したのよ。ちゃんと録画したから後で観てね？　あ、二人の名前は今日「蘭君と竜胆君が来るのよ」って話しかけたら、言い出したの……初めての言葉が、二人の名前だなんて。あなた達は、本当に仲良しねぇ」
「「っ！」」
武道の母親の言葉に、蘭と竜胆は顔を見合わせ――蘭は再び武道を、そして竜胆は反対側から武道を抱いた蘭ごと抱き締めたのだった。

話せるように、そして歩けるようになった武道に、蘭が言い聞かせるようになったことがある。

「タケミチ、おれのことまもってくれる？」
「らぁく？」

そして今日も座る武道の前でしゃがみ、顔を覗き込んで言い聞かせていると、青い瞳がきょとんとして見上げてきた。その目を真っ直に見返して、蘭はいつものように話の先を続ける。
「おれ、タケミチがケガしないかしんぱい」
「う？」
「ないてないか、しんぱい」
「む」
「だからげんきで、わらってて？　そしたらおれも、わらえるから」
そう言ってジッと見つめる蘭を、大きな目でジッと見返す。次いでブンッと音のする勢いで頷くと、武道は顔を上げてピカピカの——前に、蘭に心を許した時に見せてくれた、いや、それ以上に眩しい顔で笑ってくれた。
「う！」
「ありがとな……タケミチはおれの、おれだけのタケミチでいてくれな？」
そして話を締め括ると蘭は武道の好きな、綺麗な表情（かお）で笑って見せた。

スキの日

従弟である武道と会ってから、二年が経過した。現在、灰谷蘭六歳。今年の五月に七歳になる彼は、四月に六本木の小学校に入学する。

そんな訳で、一月。蘭は、父方の祖母から黒のランドセルを贈られた。竜胆は羨ましそうに見ているが、中身が大人の蘭にとってはクソダサ以外の何物でもない。

とは言え、現在二歳の武道の反応が見たくて、蘭は花垣家にランドセル持参で向かおうとした――が、蘭の母親から「外で汚したりしたら困るから、武道君を呼びましょうね」と言われて、武道の母と共に灰谷家に招くことになった。ちなみに高級一戸建てである。

「タケミチ！」

「りんどーくん！　おうち、おっきーねっ」

まだ小さいので、武道は今まで近所の公園やスーパーくらいで、それ以外の外出をしたことがなかった。その為、電車で母親と二人で六本木にある灰谷家に来た武道は、早くも青い目をキラキラさせていた。そんな武道に前と同じ、お団子ヘアーになった竜胆が「へへっ」と満足そうに笑う。二人とも可愛いと思うが、今日のメインイベントは蘭のランドセルなので蘭は武道に声をかけた。

「いらっしゃい、武道。蘭ちゃんのランドセル、見せてやるなー」

「らんくん！　うん、みたいっ」

「よーし、おいでー？」

優しく話しかけると、途端に武道が飛びついてきた。

笑顔で差し出された手を取って、蘭はリビングへと連れていった。そして新品のランドセルを見せると、武道は「うわーっ」と歓声を上げてまずランドセルを、次いで蘭を見上げた。
「らんくん、せおって！」
「こう？」
「かっこいいっ」
「そう？」
「うんっ」
ランドセルを背負っただけで褒められたのに、照れながらも嬉しく思っていると不意に、武道が背伸びをした。そして、何だろうと武道の様子を窺う蘭の顔へ手を伸ばして引き寄せ、右頬にキスをしてきたのに固まった。
「えっと……武道？」
「ん？　これ、スキなひとにするんでしょ？」
「……え？」
「パパがママにするの。だからおれも、らんくんにしたの」
当然というように言われ、その言葉を頭の中で反芻し――理解した瞬間、蘭はたまらず真っ赤になった。
（スキって……え、好き？　武道が俺を？　いや、まだ二歳だから恋愛的な意味じゃないとしても……キスするくらい、好き？　マジ？）
脳内で狼狽える蘭に対してやりたいようにやり、言いたいことを言った武道が満足そうに笑う。蘭に溺愛されている武道は、子供心に蘭には何でも許されると知っているから、気持ちを示すことに躊躇がないのだ。そのことに気づき、蘭はしみじみと幸せを噛み締めた。

……その夜、灰谷家では蘭の母親と竜胆と三人で、家族会議が開かれた。

「蘭は、武道君を好きよね？」
「……そりゃあ、従弟だし」
「誤魔化さなくて良いわ。同性とか家族とかで、恋する気持ちは止められないし……お母さんも、菜々子のことをそういう意味で好きだし」
「え」
「まあ、菜々子が旦那のことを好きで、幸せだから見守ってるけどね……ただ、今日のが恋愛未満でも。今後、武道君『が』蘭のことを恋愛として好きになったとしても、息子が決めたことなら菜々子達は認めると思うの。だとしたら、花垣家との交流もずっと続くでしょうから、私も応援するわね」
「えー！　タケミチが兄ちゃんのヨメになったら、おれの弟じゃなくなるだろっ!?」
「竜胆？　戸籍は変わらないから従弟というか、弟分なのは変わらないわよ？　あと、蘭と付き合うようになったらいずれ一緒に暮らすようになるわね」
「そーなの？　じゃあ、いいや。サンセー！」
「……俺、頑張るわー」

母親にカミングアウトされ、弟共々己の欲求に従って賛成されたのに、蘭はそう宣言した。

ヤクソクの日

小学生になった蘭が始めたのは、小学校の掌握と変態オヤジや色ボケババァからのカツアゲだった。

（灰狂戦争まで待ってられっか。チームを作る気はねぇけど、動かせる駒と金はいくらあってもいーからな）

ただし、今回は犯罪歴をつける気はないので自分からは喧嘩を売らず、上級生やその兄達からの喧嘩を買い。カツアゲも蘭の容姿に目をつけて寄ってくるのを返り討ちにし、家族や会社にバラすとおど、いや『話し合い』をして穏便に金を巻き上げた。

……だが、このやり方だと前よりも、怪我しやすくなるのがデメリットで。

「らんぐんー！」

ついうっかり殴られ、左頬を腫らして帰ると竜胆が徐に電話で武道を召喚した。意味が解らず問い詰めると「一人でケンカしてズルい！」と言われた。確かに、蘭への仕返しとしては完璧である。

（俺が怪我しねぇとは、約束してねーけど……あー、ヤバい。ボロボロ泣いてる）

正直、自分を心配して泣いてくれるのは嬉しい。

ただ、やはり泣き顔は見ていて胸が痛むし――だからと言って、喧嘩やカツアゲをやめるつもりはないので、蘭は少し考えて口を開いた。

「今度から、怪我しないように気をつけるなー」

「らんぐ……っく、ケンカ、しないと……ダメぇ？」

泣きじゃくりながらも、武道に聞いて来られて少し驚く。問答無用で、やめろと言われると思ったからだ。

けれど、自由に動かせる駒と金を手に入れる為、蘭はやめる訳にはいかない。

「駄目なんだ……ゴメンなー？」
謝った蘭に、竜胆と成り行きを見守っていた母親が、ギョッと目を見張るのが解った。思えば前の記憶を得てから、いや、その前からもこうして誰かに謝るのは初めてかもしれない。
「っん、コレはったら、ゆるすっ」
そう言って、武道が差し出してきたのは絆創膏だった。何故、幼児の武道がこんなものを。驚いて、武道を連れてきた武道の母親に目線を向けると「蘭君の影響よ」と言ってきた。
「武道、蘭君と約束してるでしょ？　だから、危ないことや乱暴なことはしないんだけど……転んだりは、普通にあって。そういう時、泣くのを我慢する武道に絆創膏を貼っていたら覚えたみたいでね。今日、来る時に持っていって、蘭君に貼るんだって」
「ママさん……武道……」
「らんくん！」
「……ありがとう。武道、貼ってくれる？」
「うんっ」
武道の母親から話を聞き、あまりの健気さに感動していると、武道が再び絆創膏を蘭へと差し出してきた。
それにお礼を言って頷くと、武道は涙に濡れた青い瞳を嬉しそうに細めて――身を屈めた蘭の左頬に絆創膏を貼り、更に「いたいのいたいのとんでけっ」とおまじないまでしてくれたのだった。
……小学校の掌握はすぐに終わり、その後は近隣の小中学校の悪ガキや不良を返り討ちにし駒にした。蘭や竜胆が怪我をする度に、武道が泣きながら絆創膏を貼りに来てくれることになるのだが。
まさかそんな武道が幼稚園で体の弱い男の子の、そして小学校で喧嘩に弱くてよく怪我をしている男の子の面

倒を見て、友達になるとは思わなかった。

※

実は前、武道に惚れた時に彼について調べさせたことがある。自分を棚上げして何だが、クソデカ感情を随分と向けられていたからだ。

そんな中、武道の父方の従兄のマサルという奴が、総長代理である武道の威を借りてデカい顔をしていると知った。腹が立った蘭は単身、マサルのところへと乗り込んだ。

「オマエが、代理の名前使ってデカい顔してる奴ー？　雑魚じゃーん……ってか、オマエがやってるコトって俺の大事な代理も、そんな代理の下にいる俺らも下に見てるってコトなんだけどー？　ありえなくねー？」

「は、はい、灰谷蘭……っ!?」

「はーい、蘭ちゃんでーす……てか、質問に答えろー？」

「ハイッ！　ありえませんっ、もう二度と致しませんっ！」

「約束なー？　……てか、二度目はねぇから」

壁ドンならぬ足ドンをしながら話すと、マサルは地面に膝をつき土下座した。そんな相手を『約束の証』として警棒で殴って気絶させ、蘭は集会に参加する為に武蔵神社へと向かった。

……そしてタイムリープし、武道の従兄という新たなポジションを得た蘭は。

「俺の母親は武道ママさんの姉で、俺と武道は従兄弟だろー？」

「うん」

「つまり、武道パパさんの兄弟姉妹の子供も、武道の従兄弟になるんだよなー」
「……でもおれ、らんくんとりんどーくんいがいのいとこ、あったことないよ？」
あと三ヶ月くらいで四歳になる武道の、語彙が増えた言葉を聞いて蘭はにっこりと笑った。
武道の父方の祖父母はいるが、母方の祖父母は事故で亡くなっている。そうなると本来はお盆と正月、どちらも父方の祖父母宅で過ごしそうだが、蘭の母親が親代わりに妹を進学させたことと武道が生まれてからの交流故に、灰谷家は母方の実家扱いになっていた。
結果、お盆に父方の祖父母宅に行くなら、年末年始は灰谷家。年末年始に父方の祖父母宅に行くなら、お盆は灰谷家で過ごす。ちなみに仕事や愛人達との逢瀬に忙しい灰谷父は、相変わらず家にいない。
話を戻すが、父方の祖父母は遠い徳島県に住んでいるので年に一回、会いに行っているが蘭の言い聞かせが功を成し、武道は闇雲に外に出たり、他の子供と遊んだりしない。
一方、件（くだん）のマサルはやんちゃな悪ガキで。武道に目をつければ良くてパシリ、悪ければ何かと連れ回されて怪我をする可能性がある。それ故、蘭の為に（ここ重要）危ないことをしたくない武道の意向を汲んで、両親は手紙やお歳暮などの最低限の付き合いだけにしているそうだ。
（流石に、幼稚園や小学校に入ればダチの一人も作らねぇのは難しいと思うけど……マサルだけはこれからも、ぜってぇ武道には近づかせねぇからな）
そう心に誓い、蘭は武道を膝に乗せたまま、笑顔で話を締め括った。
「そっかー。会わねーんなら、関係ねぇなー？」

タイムリープしたら花垣武道の従兄だった件について

発行日　2023 年 4 月 2 日

著者　あずま渡里
https://www.pixiv.net/member.php?id=3229042
連絡先　contact@rainbow.sakura.ne.jp
印刷　シメケンプリント / かんたん表紙メーカー

Generated by pixiv
本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。